

人文・社会科学系学生のためのフィールド学の試み

—アジアの〈水〉をテーマに—

重 松 伸 司 (文学部アジア文化学科)

フィールドワークは、一般に「臨地調査」「現地調査」「実地調査」「野外調査」などと呼ばれる。閉じられた空間（教室や大講義室）での一方的な授・受講＝「座学」に対して、実地に出向いてさまざまな関心の対象を選び、その動態を自ら学ぶということである。問題関心の立て方やアプローチも、理系・文系あるいは各系ごとの研究領域の違いによってさまざまであろう。

本稿では、フィールドワークとは何かといった概念や定義づけの総論や、どのように実施すれば効果的かといった技術的な手法だけを論じるのではない。本稿のねらいは、以下の二点にある。

第一に、フィールド学という枠組みを単に「臨地での体験学習」という観点からもう少し広げて、「面白いと思う対象の発見」→「疑似体験学習（映像・インターネット情報などから基礎情報を得る）」→「基礎資料情報の収集（統計・文字資料・報告書などの読み方）」→「現地体験（現場にでかける）」→「自己表現（見た・聞いた・考えた内容をレポート・卒業論文などにまとめ、それを発表する）」→「批判にもとづく再検証」という一連の複合的な学習方式と位置づけている。

第二には、1年ごとの単年度シラバスではなく、1～3年間（2～6学期＝セメスター）の複数年度にわたる段階的なシラバスを設定している。

具体的には、以下のような試みを紹介したい。

人文・社会科学系の大学・学部（文・経済・経営・人間各学部）で、
特定の専攻に属していない段階での2～3年生を対象として、
フィールドワークの多様さを伝え、問題関心を引き起こし、
彼らに実地調査を経験させ、
研究レポートや卒業論文など何らかの形で文章表現させ、かつ発表させる、
その素材として「水」を対象に、2001年から2年間実施してきた講義・演習を紹介する。

PHASE 1：問題関心の対象とその面白さを掘り起こす

当然のことだが、授業を行う側の私が、教えるテーマについて好奇心を持ち、面白がることが第一要件である。そして、そのテーマをなぜ選んだのか、私自身がそのテーマについてどのよう

にアプローチしてきたのか、関心を持った背景は何かを受講生に伝え、受講生と共有することがまず課題となる。

ここ10年間、私の研究関心はアジアの水に向けられている。私自身が水を対象とした研究に好奇心を持っている背景は以下のようである。

●インドの水—農村と水資源

1980年代から旧文部省の科学研究費や民間財団の研究助成金の支援を受けて、断続的に10年にわたって、南インド内陸農村の土地・家計悉皆調査を行ってきた。

自転車、徒歩、モーターバイクを調査のアシとして利用しての農家の各戸調査は、炎天下40℃に近い亜熱帯内陸地帯ではかなり厳しい状況であった。特に、1987年に数十年ぶりの大干ばつ下にあった南インドの農村では、水（の枯渇）が農村の経済のみならず、動植物、ヒトの生活のすべてを決定付ける（運命付ける）ことを痛感した（こうした調査を通じて得られたデータをもとにした、水を主要課題とする研究論文や著書はまだまとまっていないのだが、いずれ「南インド内陸農村家計悉皆調査報告」のなかで分析したいと考えている）。

●日本の水—島の生活と水資源

わが国での「水」の実態と地域生活における水の意義について考え始めたのは、三重県での全県調査である。1998～99年、三重県の看護福祉教育事業の一環として、英語・日本語バイリンガルのドキュメンタリー・ビデオ映像の制作に取りかかった（制作された映像は、岩手県立大学、三重大学など国内の大学の他に、国際通信回線を通じてアメリカのノースキャロライナ州立大学およびハワイ大学への双方向授業の講義資料として提供された）。私はこの映像の制作統括を行ったが、準備作業としてプロのディレクターとともに、和歌山・奈良県境の奥山山村、伊勢湾沿いの平野部、さらに、伊勢・志摩の半島部、伊勢湾に点在する島嶼部などほぼ全県を1年かけて実地に回ってみた。特に神島では、春・夏・冬3期の調査によって、三島由紀夫の小説「潮騒」が描いたロマンチックな内容とは裏腹に、飲用・生活用水や防火用水の確保、生活雑排水の浄化、島周辺海域漁場の水質保全など、水をめぐるきわめてきびしい規制と島民の自主管理・運営が深刻な課題であることが十分に理解できた。

●アジアの水—海域圏文明とベンガル湾＝水社会（hydro=regional）論

1990年代から2002年の間には、上記の調査とほぼ同時並行であったが、「ベンガル湾海域圏」の調査に向かった。日本大学総合科学研究所のプロジェクトや南アジアを対象とする旧文部省科学研究費による環インド洋を調査主題とする「特定研究プロジェクト」の一員に加えてもらっての調査である。

東南アジアと、南アジア特にその東岸部の南インドとを結合するベンガル湾海域は、どのような歴史的役割を担ってきたのかが私の関心である。ベンガル湾に点在する海港、交易ルート、内陸地域との連結ルート、海域圏に到来したアジア・ヨーロッパの諸民族集団の実態と社会組織、彼らと現地住民との海陸のネットワーク、現地住民の生活実態、造船・操船手法など…関心は

次々に生まれるが、ほとんどが私の専門外の内容である。

そこで、ほぼ10年をかけて、年2、3回休暇時期を利用して断続的に歩いて回った。南インドのタミルナードゥ州の東海岸部、東部のコルカタ（カルカッタ）からバングラデシュのダッカ、チッタゴンへ、ミャンマーのヤンゴン（ラングーン）からモラミヤインへ、タイのトランからブーケットへ、マレーシアのペナンからシンガポールにかけて、インドネシア・スマトラ島のメダン、ドゥマイなどを經由してのマラッカ海峡のジグザグ航路のローカルフェリーの旅、ローカルバスを利用した調査であった。この結果、インド西部のマラバール沿岸（アラビア海）、東部のベンガル湾、東南アジアとの接点海域圏にあるアングマン海、マレー半島西部のマラッカ海峡、マレー半島東部のタイ（シャム）湾をほぼ周回しえた。

さて、こうした私個人の「水」に対する好奇心や面白さを、興味の対象もその関心の度合いもばらばらな不特定多数の学生に、どのように伝え、受講生とどのように好奇心を共有するのか。それはかなりしんどい問題ではあった。

PHASE 2：問題関心の対象とその面白さを伝える～「擬似体験学習」

不特定多数の受講生を対象とする場合、まず、「水」が生み出す多様なイメージを彼らに喚起することであった。そこで、2001年度～2002年度の講義・演習（各約120名～300名）では、次のようなシラバスにもとづいて講義を行った。

●「水」を対象とする研究関心と面白さをどう伝えたか—複数の講義群構成とシラバスの内容

A．2001年度後期、『現代アジアと伝統（二）南アジア』（受講生約120名）

テーマ：「水と環境の文明史」

講義の概要：1．水と生態系—生活と気候の関係、モンスーンアジアの水とその利用。

2．水と水利システム—保水・取水・排水機能の比較史。

3．水と経済—農業水利と水運システム（物流システムとしての河川・海）

4．水と民俗—水をめぐる文化論、浄不浄観（インドの水と聖性）、砂漠文化と水文化（西アジア）、水の儀礼（農耕儀礼）、水と神々（竜神・蛇神）

5．アジアの水とは。

講義の方法：水に関するビデオ映像—映像資料からよむ

統計資料の分析—統計の「うそ」を見抜く

地図と歴史資料—地図と文字資料をよむ

関西周辺の水利・水環境の実地調査—ダムを見て歩く

実地調査の報告をまとめる—レポートを書く

報告資料を発表する—恥をかく（批判を受ける、再検証する）

B．2002年度前・後期、『現代アジアと伝統（二）南アジア』（受講生約90名）

テーマ：「＜水＞とインド文明史」

講義の概要：

インドでは、水は、飲用水や農業灌漑などの実用面から、浄・不浄観に関わる宗教儀礼上の意味まで多様である。現在、インドでは、異常気象や地下水の枯渇、農産物の生産拡大による水需要の急増、更にはペットボトル水の需要など、水不足を生じさせる要因が複雑化している。

この講義（演習）では、**インドの水問題をテーマにして日本の水問題、アジアの水問題を多面的に考える。**

講義期間中に、受講生は居住地域における水と環境について、実際に現場へ出かけて調査を行う。

講義では、映像資料、統計、報告書などを利用する。また、宗教・経済・社会・芸能など、水と関わるテーマ毎に、学内・学外（外国人を含む）の講師陣による臨時講演を行うことがある*。

授業計画：

【前期授業】

第1回～第3回：南アジアのエコロジーと水問題

第4回～第6回：インダス文明と水（古代都市国家と水利用）

第7回～第9回：ヒンドゥー教・イスラーム教と水（学内教授との共同講義）

第10回～第13回：インドの音楽・芸能と水（学外講師との共同授業）

【後期授業】

第1回～第3回：南アジアの農業文明と水問題

第4回～第6回：生活世界と水問題（受講生による臨地実習）

第7回～第9回：インドの飲用水—ペットボトルの水は誰のものか（受講生による調査）

第10回～第13回：水とはなんだ

C．2002年度前・後期、『アジア文化論』（受講生約270名）

テーマ：「生態系とアジア文化」

講義の概要：

- アジア諸地域の文化・経済・社会・生活様式は多様である。その多様性の基層にはアジアに特有の生態系が存在する。
- この講義では、**アジアの生態系**をキー・コンセプトにして、さまざまな**アジア文化の特徴**を歴史的条件と地域社会（場）の概念から講義する。講義は、客員教授やそれぞれの分野

を専門とする学内外の臨時講師，そしてテーマによっては外国人講師による特別講義を行うことがある。

- 講義は3つの領域からなる。第一に，アジアに特有の生態系と自然環境，第二に，生態系と社会・経済環境，そして，第三に，生態系と文化環境である。

- 講義計画

- < 前期講義 >

- 第1回～第3回 アジアの生態系と自然環境—講義・ビデオ映像・OHP映像，資料

- 第4回～第6回 アジアの生活世界と生態系—講義・ビデオ映像・OHP映像，資料

- 第7回～第9回 アジアの宗教文化と生態系—特別講義・ビデオ映像・写真資料

- 第10回～第12回 アジアの芸能文化と生態系—特別講義・ビデオ映像・写真資料

- < 後期講義 >

- 第1回～第3回 アジアの技術文化と生活世界—講義・ビデオ映像・OHP，資料

- 第4回～第6回 アジアの思想と生態系—講義・ビデオ映像・OHP映像，資料

- 第7回～第9回 アジアの思想と生態系—特別講義・ビデオ映像・写真資料

- 第10回～第12回 アジアの言語文化と生態系—特別講義・ビデオ映像・写真資料

- < 受講の条件 >

- この講義では，文化・文学・思想などの専攻者以外にも，経済・社会・政治に関心を持つ学生も対象とする。
 - 毎回の講義では，出欠確認をかねた「質問・コメント票」を配布する。
 - 受講生は，講義中に質問やコメントをできるだけ出すことを歓迎する。
-

- 「水」に関するキーワード

一連の講義では，水を「生態系」「水利」「経済」「文化・民俗」の4つのキーワードから連想するように試みている。さらに，講義中に配布した資料（統計・グラフ・文献抜粋資料・写真など）から，水の多面的・多面的なあり方を紹介した。こうした紹介の中に断片的ではあるが，私の水研究の関心を織り込ませるように試みた。

- 水と生態系—モンスーンの映像資料による「擬似体験」

私はどの講義の最初にも，生態系がわれわれの生活様式や文化の基盤にあることを紹介することになっている（今西錦司氏の「生物社会の論理」「生物の世界」あるいは梅棹忠夫氏の「文明の生態史観」がベースになっている）。その視覚的素材として，NHK制作の特別番組ビデオ「モンスーン・ロード」（100分）は最適であった。3月半ば，マダガスカル島上空に発生した上昇気流が，アラビア海を越え，3月末から4月には南インド西南端に上陸して大量の雨を降らし，

南インド内陸を横断してベンガル湾を越えてヒマラヤ山系にぶつかり、さらに5月にチベットでは空風となるが、再び雲南に雨をもたらして、やがて6、7月には日本の梅雨となるドキュメンタリーである。アラビア語の「季節」を示すムンシムが、やがてモンスーンに転化し、インドでは大雨をもたらす季節風＝「南西モンスーン」となり、その末端が日本の「梅雨」に連なるという生態系連鎖を実感し、擬似体験してもらうことがねらいである。

映像には、マダガスカル島の島民生活に及ぼすモンスーンのもたらす漁の収穫、南インドにおける天水農耕と雨乞いの儀礼、雲南・日本の「虫追い儀礼」など、4つのキーワードがアジア各地・各民族の生活実態として網羅的に紹介されている。その点で、この映像資料は受講生にかなりの新鮮さとインパクトを与えてきた。

● 水利・経済資源としての水—映像・統計・文献資料

この文脈では、BBCの映像資料をもとに、現代社会における水をめぐる問題を考えることにした。具体的には、数本の映像に紹介された、西アジア世界における河川水の配分をめぐる紛争、アメリカにおけるペットボトル水の国際商品化＝「ウォータービジネス」の実態、水資源の占有の結果生じた地盤沈下などの社会問題など、特に、「水は誰のものか」を考える素材とした。

わが国の水資源については、高度経済成長期における工業化と水資源利用、生活インフラの整備と水利用の側面から、ダム建設とその意義を統計と現代経済史の概要紹介に当てた。特に、ダムの役割・意義については、「ダムはムダ」「ダムは負のインフラ」という前提ではなく、ネガ・ポジ両側面の評価が可能なことを示し、彼等の実地調査の評価に任せる余地を残している。

● 学内外の特別講師陣による関連講義*

第一回	木村 茂	本学アジア文化学科元講師 (タイ地域研究・NPO活動家)	タイのNPO活動について (タイ)
第二回	田丸 文崇	NPOシナジー・グリーン代表 (立命館大4年生)(当時)	アジア・フェアトレードの実践活動 (インド・日本)
第三回	大麻 豊	トラベル・ミトラ代表 (NPOアジア協会理事)	南アジア旅行の30年(インド・ネパール)
第四回	正信 公章	追手門学院大学・文・教授 (インド古典学)	インド・ヒンドゥー教を理解する (インド・日本)
第五回	馬場 雄司	三重県立大学助教授 (民族音楽学・福祉民族学)	民族音楽学・アジア大衆芸能論 (タイ・雲南地方)
第六回	森本 治樹	大阪市立大学・理学部 名誉教授(理論統計学)	インド・カルカッタを歩いてみれば (インド・日本)
第七回	大場 昇	予備校「昂」チェーンkk会長 (からゆきさん研究会代表)	アジアのからゆきさん (インド・日本)

[] 大学教育と体験型学習

第八回	西谷 公孝	追手門学院大学OB (オーストラリア・日本)	なぜMBAが注目されるのか (オーストラリア・MBA取得)
第九回	高田 剛司	地域計画建築研究所 = ARPAK (主任研究員)	日本・東南アジアのまちおこし (インドネシア・日本)
第十一回	ダ・シルヴァ	本学国際経営学科教授 (国際経済・スリランカ出身)	スリランカの社会と文化 (スリランカ・日本)
第十二回	林 華生	追手門学院大学客員教授	
第十三回	同	早稲田大・アジア太平洋研究 所副所長・中華経済研究所長	21世紀東アジア経済はどう動くか (中国・東南アジア)
第十四回	同		

● 関西周辺のダムを見て歩く―実地調査の試みとレポート作成

1 <課題を出す>

この試みは、確か2002年度前期の講義で行った。夏季休暇中に「ダム」をキーワードにして課したアサインメントである。具体的には、工業・生活(水道用)・農業・保水などダムの目的や機能の如何を問わない、受講生各人が関西にあるダムを探してきて、各受講生が個別に実地調査し、地域社会における役割・機能を中心に調べ、20枚のレポートにまとめる、という課題である。

2 <予見させない>

講義中に、私のほうから実地調査の条件や方法・手法を特に指示することはない。KJ法のような手法についても、まったく説明しない。カードやノートのとり方も教示しない。調査に必要な道具(カメラ、地図、ノートなど)も予め説明しない。つまり、予見をもたらしそうな内容については、なにもいわないことにしている。

3 <質問から学ぶ>

ただし、講義中、講義後に、受講生から上の ~ に関してさまざまな質問が出された。こうした質問自体が、彼等の問題関心を知る上での重要な素材となる。また、質問と私の回答とのやり取りの中から、彼等の好奇心を引き出すことも可能となる。彼等が実地調査を行う上でのインセンティブを高めることにもなると考えたので、質問に対しては関連資料や文献、あるいは注意事項を説明することにした。要は、どれだけの質問が出るか、どのような内容の質問がもたらされるか、どのような質量の質問が出てくるか、さらには、質疑をもとにして、彼らのレポートの中でその成果がどのような形で反映されたか、がキーポイントとなる。質疑そのものがフィールドワークの始まりでもあり、課題によってはフィールドワークの核心にもなりうるのである。

4 <質問に対応する，好奇心を引き出す>

問題は，講義時間では足らず，相当な時間を要するという点である。この点については，講義時間外の「オフィスアワー」を利用して（というより，受講生は，のべつ幕なしに研究室にやってくるのであるが），彼らに助言することも可能である。

少なくとも，以下の点についてはコメントしている。

現地の人とは出来るだけ話すように。

現地では，しばらく何もせず，ボーとして時間を過ごすこと。

現場では，人と土と植物を眺める（私自身は植物にも地質にも疎いのであるが）。

5 <インターネット情報による「擬似実地調査」への批判>

受講生の多くは，現地へ行く前に，まずインターネットによって「ダム」を検索し，そこからさらに地域別・目的別に絞り込む作業を行っているようである。インターネット利用の情報収集もフィールドワークの一つの手法として定着してきた段階にある。

レポートの中には，府や国の水管理事務所や水資源公団を訪ねて聞き取り調査をするものもあった。また，図書館で関連文献を調べたものも散見した。しかし，かなり多くは，インターネット情報のみを貼り付けて，その裏づけ調査や比較資料による補足検証を行っていないものも見られた。つまり，現地に出向かずに，インターネットから得られた情報のみでの「擬似実地調査（VFW＝ヴァーチャル・フィールド・ワーク）」に満足するという傾向が生じてきている。こうした傾向は，何も私の「水に関する実地調査」に限らない。他の多くの演習レポートや学生の報告に顕在化している。「行ったつもり」「見たつもり」「聞いたつもり」そして「調べたつもり」のレポートが横行しているのである。しかし，これは，危険である。

インターネット情報については，情報量とその内容に精粗がありすぎる。また，情報内容の質についても，単なる情緒的メモの類から統計や文献資料を網羅した高度な資料価値を持つ報告までである。中傷的・感情的メモから客観的・分析的内容にいたるまで多様である。あまりにも多い情報の中からいかに質的に高く，内容面で信頼にたる情報を抽出するか，といった「電子情報（メディア）学」との関連からも「フィールド学」を構想し，教育しなければならない段階にある。

PHASE 3：実地調査をまとめる—フィールドレポートを書く

● レポートは多様であるが...

レポートには，写真の貼り付け，ダムと周辺地形のデッサン，パンフレットの添付などあり，これも多様である。概して，印象批評的な内容（面白かった，大切です，貴重です，ムダです...といった類）は予想外に少ない。彼等の調査結果について，統計や聞き取りを利用して，それなりに根拠づけをしているのである（この点は評価できる）。

レポートの内容については、その後の講義で典型例をピックアップして、好例・批判例それぞれの内容を具体的に紹介した。特に、統計資料の読みとり方については、繰り返し指摘した（この点については、経済・経営・心理・社会など統計分析を扱う学部・学科との共同講義などによる「連携フィールド学」なども考えられよう）。問題は、その根拠となるべき資料が少なかったり、一面的であったり、課題に対応する資料を用いていなかったりすることである。これは、私の講義方法と内容に責任があるといえよう。

●実験をする—水質・成分の分析実験

レポート（そして、それをもとにした卒業論文）の中には、独創的な想見が見られた。それは、講義の中で上映したドキュメンタリ映像と文献資料に触発された受講生の作品である。映像はアメリカとインドにおける「ウォータービジネス」の実態を描いた内容、そして文献は、水のグローバル商品化、水の搾取の実態を批判的に紹介した『ブルーゴールド』である。

受講生は、まず、経営学部の某教授の研究室を訪ねて研究上の助言を求めた。彼は夏期休暇中には、自宅近くのコンビニエンス・ストアで、各種ミネラルウォーターの種類・内容を逐一リストアップして商品化された水のリストを作成している。さらに、それらの幾種類かを購入して、受講生の出身高校を訪ねて理科実験室を借り受け、成分分析を行った。その分析はかなり詳細であり、説得力を持つ。「コンビニエンス・ストアにおける水商品の分類」「水商品の化学実験」は立派なフィールドワークであり、それらに基づいた分析と、「将来における水問題への提言」という複合的な内容を提示したこの卒業論文は秀逸である。こうした独自の実地調査内容を生み出した学生は数少ない。しかし、今後も助言の仕方によってはこのような学生は現れるかもしれない。このような受講生の行動力や構想力を、今後どのように後発の受講生に継承して行くかは我々の課題となっている。

PHASE 4：実地調査をまとめる—卒業レポート，卒業論文を書く

●論文・レポートにまとめる

2，3年生を対象にした講義（「アジア文化論」「現代アジアと伝統」），4年生の演習（「アジア文化演習」＝卒業論文演習）では、それぞれテーマや講義・演習を重複させながら（講義内容は異なっているが），関心を持たせるように試みた。2002年度の「アジア文化演習」＝卒業論文演習の受講生は26名であった。彼等は、それ以前に上記講義のいずれかを受講している。26名の中には、広義の「水」に関心を持つ者もいると考えられたが、卒業論文に水をテーマにせよと強制も指導もしてはいない。あくまでも彼等の創発性に任せている（好奇心は決して強制や規制からは生まれない）。

卒業レポートや卒業論文にまとめたものは9名であった。そのうち、水＝「命の水（spirits）」，

つまり酒を論文素材にしたものが2本(「日本酒文化論」「焼酎の伝来と分布」), 水と米文化論が2本(「ナレズシと水田稲作」「タイ米の生産と流通」), アジアの水社会と環境問題が2本(「えびの養殖と環境変化」「エコツーリズム」), 水の商品化が1本(「日本の飲料水問題」), その他, 部分的に水に言及した論文が2本(「東南アジアの紅茶」「インドの伝承文化」)(なお, テーマ名は卒業論文名そのものではなく, 私が要約・簡潔化した)であった。論文テーマに現れたように, 酒・すし・タイ米・えび養殖・伝承など, 彼らは, 私の予期せぬほど, 「水」のイメージと関心を広げた。しかも, その多くが海外も含めての実地調査(海外研修ではなく, 個人での調査)によるものであった。その成果が論文に結実したといえる。

●論文・レポートを講評する

提出された論文・レポートについては, ゼミ受講生相互にコメントや批判を加えあうが, その最終段階として, 卒論については「口述試験」において, 他の教員も加えて20～30分間の批評を加え, 学科内「第三者評価」を行うことになる。

以上, 私は不十分ながら「フィールド学」の試論をデッサンした。拙論では, 「フィールド学」が単に「現場(といっても, これまた多様であるが)」に出かけて, モノやヒトを見, 体を動かすことにはとどまらないことを強調した。

面白い対象への想像力, 文献から基礎情報を得る知識, さまざまな実験, ヒトから聞き取る能力, 目に見えない背景を感じ取るセンス, 数字から読み取る力など, 複合的で多面的な作業が「フィールド学」なのではないかと私は考える。その意味では, これからの大学教育のカリキュラムでは, コンピューター情報学, 生態学, 統計学, 歴史学, あるいはテーマによっては, 古典文学や現代文学, 詩・俳句・短歌などとも連携(相互乗り入れ)した「総合学」としての枠組を構想する必要があると思う。

< 注記 >

本稿で紹介しました講義・演習・実地調査・海外調査については, 「2002年度追手門学院大学研究助成制度」の「特色ある個人研究助成」による『南アジア・< 水 >の文明史—生態系環境・文化・経済に関する予備調査』および2003年度文部科学省科学研究費基盤研究C(2)『ベンガル湾海域圏の研究1』の助成を受けました。ここに記して追手門学院大学, 日本私立大学振興・共済事業団, および文部科学省に謝意を表します。